

## 『白い巨塔』

学生時代に出会った41歳の女性、Tさんとの出会いが、私がホスピスを目指す原点となった。そのTさんが亡くなる直前に、私にと、家族に預けてくれた本が山崎豊子さんの「白い巨塔」であった。私はTさんの全人的な苦痛を目の前にして、彼女の話をお聴きすることしかできなかった。そして、彼女が医療者から理解されないことに対する怒りや満たされない思いを抱いていることを傍で感じた。そんな彼女から贈られた「白い巨塔」。私はそれが彼女からの最後のメッセージだと思った。

先月まで、放映されていた「白い巨塔」は高視聴率で、何かと話題になった。私の周りでも楽しみにしている人が多いようだった。私自身、高校時代に田宮二郎主演の前作をずっと見ていたこともあり、またTさんとのこともあったので、改めて欠かさず見た。思えば、前作では最終回の前に田宮二郎さんが自殺するという、ショッキングかつドラマチックな出来事もあり、より心の中に残っている。

このドラマを見た時、おそらく多くの人が理想の医師像として、主役である財前医師ではなく、その友人である里見医師をあげたのではないだろうか。外科医としてその実力が世界的に評価されていた財前医師は、教授になるという大きな夢を達成するために、あらゆる手段を使いその地位まで上り詰めていく。患者や家族に対しては、常に自信に満ち溢れた態度で接し、多くの患者が彼のメスで救われていく。しかし、その陰では、彼の強引なまでの治療に質問することすら許されず、満たされない思いのままにいる患者もいた。そして、あるがん患者が財前医師の高慢かつ不誠実な対応により、納得のい



かない死を迎えてしまう。最後まで誠実さに欠けた彼の態度は家族（遺族）の気持ちをも傷つけ、医療訴訟に至るのである。

一方、財前医師の友人であり、ライバルでもある里見医師は患者や家族と、一人の人間同士として正面から向き合いながら、日々の診療と研究をこなしていた。財前医師の実力を誰よりも認めていながらも、患者や家族に対する不誠実な態度が許せない彼は、何回と無く友人に苦言を呈するが、聞き入れられない。そして、自らも関わりを持ったがん患者が死に至り、その家族が訴訟を起こした際、家族側に立ち、証言をするのである。このドラマの中で里見医師の言葉により発信された多くのメッセージは、「ホスピスのこころ」と言えるものが多く、とても共感できた。

改めて、Tさんのことを思い出した。当時、私たちの大学病院では教授回診の際、患者の横で主治医が教授にカルテやレントゲン写真を見せながら、病状や検査結果、治療について説明していることが多かった。「がん患者」

の場合は、日本語で病名を言うわけにはいかないので、英語やドイツ語を交えて説明するわけである。

ある時、Tさんがこんな話をしていた。「教授回診の時に主治医が写真（アイソトープ検査）を教授に見せて説明しているの。黒く写っているところを指差して、難しい顔をしながら話していたので、後でそのことを主治医に聞いたら、その黒い影は便が写っていたんです、と誤魔化してたわ。多分、悪いものなんだわ。」当時、学生であった私も、回診時に患者の目の前で話すことにあまり疑問を持っていなかったのだが、いったい患者はどんな気持ちで聞いていたのだろうか。いつまでも病状が好転せず、不安に駆られている患者にとっては主治医と教授のやり取りに一喜一憂したことと思う。回診時、厳しい教授にいたっては、患者の前で主治医を叱りつけることもあった。まさに患者不在のやり取りである。山崎豊子さんが描いた医療の現場は、当時確かに、とても患者本位とは言えないものだったのである。

今回、里見医師の患者に対する真摯な姿勢は胸打たれるものであった。患者と一人の人間同士として正面から向き合い、相手の立場に立って考えながら、共に悩み、共に闘う姿勢を示すこと。医療の現場で患者や家族から最も医療者に求められる態度であろう。今回、このドラマが話題となった原因の一つには、この当たり前の医療が現代においてもなかなか行われていないという現実があるのだと思う。言い換えれば、今の医療はいい結果を追い求めることだけに力を注ぐがあまり、いつしか主役であるべき患者や家族が置き去りにされて

いることも多いのではないか。そんな理由から、里見医師は今の時代においても求められる医師像となり得るのかもしれない。

「白い巨塔」から発信された私たち医療者へのメッセージとは「ホスピスのこころ」、つまり「医の原点」を持ち続けることの大切さであるように思えた。Tさんは身をもって、そしてこの本を私に渡すことで、そのことを伝えなかったのだろうか。彼女の思いは今も私の中にしっかりと息づいている。

